

い。ただその中であつて、わずか十年の作家生活を、あくまでも誠実に論理的に生き抜いた島木健作の姿は、確かに

「虎狩」論（その一）

——作品の構造をめぐつて——

木村 一信

一

中島敦の作品「虎狩」は、雑誌「中央公論」の昭和九年一月号（第四十九年第一号）における新人発掘の呼びかけ、すなわち「論文・中間物・創作」の原稿募集に応じて書かれたものである。この時の募集は、中央公論社としてもかなりの力を注いだらしく、社長であつた嶋中雄作の「宣言」も付載されている。そこには、「新人出でよ、新人出でよ、今ぞ新人輩出の秋である。」との言葉がみられ、応募者の意気をそそるものがあつた。原稿締切は四月三十日、枚数は四百字詰百枚以内。その結果は、昭和九年七月、「中央公論」臨時増刊・新人号（第四十九年第八号）において、「創作」の応募総数一四五八篇という多数のうちから四篇が当選作として発表された。それは、「断然他を抜」いていと評された島木健作「盲目」、丹羽文雄「贅肉」の二篇と、「兎に色々々な条件を具備してゐる」ところの平川虎臣「生き甲斐の問題」、石川鈴子「無風帯」の四篇であつた。これらの作品は「中央公論」同号に掲載されたが、

その他に選外佳作として十篇の作品名と作者名とを付記している。中島の「虎狩」はその第八番目に記された作品であつた。

中島はこれについて、昭和九年七月十七日付、氷上英広宛葉書において、「虎狩、又してもだめなり。但し何とか佳作と称するところにはひつてゐる。なまじつか、そんなところに出ない方がよかつたのに。すこしいやになる。」と自分の心情を洩らしている。右の言葉のうち、「又してもだめなり」とあるところから、或いは中島はこれ以前にも何らかの原稿募集に応じていたかと推測されるであろう。「虎狩、又しても」ということは素直に受けとれば、他の機会に「虎狩」を投じたことがあり、その選に漏れたとの意に解される。この場合、「中央公論」に投稿した「虎狩」は、最初に投じた原稿を改稿・手直した可能性もあると考えられる。また、「又しても」のみに力点をおいた言葉と受けとれば、「虎狩」以外の作品を他の原稿募集に応じ、落選したとの意味になるであろう。この場合は、現在残されている全集収録の作品をみる限り、「昭和七年の

頃」「一つの私記として書かれた」という「斗南先生」を挙げるのが妥当かと思われる。更に、昭和八年における文芸雑誌の原稿募集の呼びかけは、「新潮」「中央公論」など盛んに行なわれている事実も指摘できるのであるが、いづれにしても、「虎狩」のように選外佳作であるにせよ明瞭に活字となつて投稿の結果がわかつているもの以外は、推測の域を出ないとするのが穩当なところであらう。

しかしまた、このような推測は、第一高等学校時代、校友会雑誌に六篇ほどの習作を発表して以来、しばらくままとまつた創作を公の場所に表わすことを試みなかつた中島が昭和七・八年頃から意欲的とも言えるような姿勢をとり始めていることを示していて、注目されねばならないであらう。昭和七年十一月、卒業論文「耽美派の研究」四百二十枚を脱稿し、翌八年三月、東京帝国大学を卒業した中島は大学院に進むと共に高等女学校の教諭となり、実質上妻子をかかえての社会人として一步を踏み出すことになる。その前後から、かねてからの願いとしての作家志望の実践をもスタートしたと言ふべきであらうか。中島が懸賞募集という形に応じ、「なまじつか、そんなところに出ない方がよかつた」というほどの自恃を持ちつつ、習作以来の創作活動を再び開始したという点を見のがしえないであらう。

そして、最も注意すべきことはこの時に中島の選びとつた、或いは獲得した創作方法である。その最初の試みは、「斗南先生」においてうかがわれるのであるが、端的に言へば、それは他者と自己との類縁・共通性を探ることによる関心と、自己への回帰、凝視という相反した内容と姿勢

つて、自分とは何かを思索し、自らの生きる方向を把握しようとする主人公像の造型なのである。この方法は、素材を中国古典に得た作品、たとえば「山月記」や「弟子」「李陵」に至るまで踏襲され、中島文学の基本的パターンとなるものである。勿論、このような後期の作品においては、その素材の活用に始まり、表現力、人物造型などすべての点に芸術的完成度の高さが顕著である。その原初的方法を「斗南先生」に得た中島は、「虎狩」においても同様に用いている。しかも、筆の進め方はある種の余裕を持って、語りの巧みさをも伴い、読者の興味をそそりつつ物語を繰り広げている。「斗南先生」のような「私記」としてではなく、はっきりと「創作」を目指した中島文学の出發の時期がここにおとずれたと言えるであらう。

二

では、その「虎狩」とはいかなる作品なのであらうか。

この作品については、これまで二つの把え方がなされてきている。一つは、瀬沼茂樹氏の「自己の存在をふくめて人間存在の得体のわからぬものを暗示し、作者の志向を早くもしめしたものだ」という指摘に始まる存在論的な見方である。続いて佐々木充氏は、「おのれに對立する不気味な外界というものの、確実な存在性」を暗示するエピソードを中島が作品の末尾に配しているとして、そこに作品の眼目を見てとつている。又、やや視点は異なるが、浜川勝彦氏は、中島の「初期作品群の総決算」であると、「社会へ

「斗南先生」に於いては、うかかえられたのである。端的に言えば、それは他者と自己との類縁・共通性を探ることによる関心と、自己への回帰、凝視という相反した内容と姿勢との、危い均衡の上に成り立った「作品と解するのである。このような、いわば自己の存在にまつわる問題を作品のテーマとして扱っているとの把握に対して、いま一つの理解として、鷺只雄氏の言うところの、「享楽主義者の心性」がこの作品には語られており、「『生の不思議』あるいは『奇怪にして魅力に富める人生』こそ主題である」との見解も見の及ばない。

一方、この作品の評価に関しては、「文章こそ年令に比しすぐれているが、後年の完成度からいえば速く及ばず、器用にまとめた感じがする」との発言から、「単に幼時の虎狩の体験を語った物語と印象されてしまう欠陥があり」、「『北方行』のような逞しい未完の作ではなく、か弱く線の細い完成品」であるとの評言まで、作品の出来栄えという観点からはやや否定的に把握する傾向にあると言えよう。いずれも「自我追求」の物語として読みとる論者の意見であるところが興味深い。すなわち、後期作品群では「己れとは何か」との命題を史料・文献中の人物に託し、見事な作品世界を繰り広げているのに比して、「虎狩」はその発想、意図こそ後期作品に貫なるものを有してはいるが形象性に乏しいとの謂なのであろう。確かにこうした評言は、的を得たものと言えよう。しかし、もう少し積極的な評価を付与したいと思う。以下の作品構造の分析を進める中で明らかにして行きたいが、私の立場は、この作品が「斗南先生」と同様の、前述したような方法意識のもとに

を見てとっている。又、ギキ橋点は異なるが、浜川勝彦氏は、中島の「初期作品群の総決算」であるとし、「社会へ描かれたものと考え、作品のテーマは「自我追求」の線に沿って在ると見たい。従って、「ある明るさ、はずんだひびき」が随所に散見することは疑いえないが、「虎狩」という作品は「明るさ・軽妙さが基調になっている」（傍点・木村）とは言えないように思う。

そして、作品は数々のエピソードそのものを語ることに中心を置くものではなく、最後の第七章に中心点があり、各エピソードは終章を導き出すための序章的、あるいはきわだたせるための背景的作用を擔っていると考えられるのである。つまり、作品は「重層的」な構成を配して、各章のエピソードが最終章におけるテーマ提示のもとに収斂していき、そのことよって各章、各エピソードに血脉が通わされるといふような、のちの「弟子」において使用された構成に似通った手法を用いていると考えたい。また、作品の評価については、前述したようなテーマの形象性に不備があることは否めないが、何よりも作者のこの作品に盛りこもうとしたテーマの持つ意味と、中島における「虎狩」という作品の果たした役割とも考えあわせて価値を見出したいと思う。「斗南先生」以上に、「自己発見の劇」としての要素は強く、のちに「光と風と夢」で語られた「此の上な魅力に富んだ怪奇な物語の構成」と「巧みな話法」とのいち早い試みも見うけられるのである。このような一応の目論見を立てた上で、以下、具体的に作品の構造分析に入っていくたいと思う。

三

作品は次のような調子で始まる。

私は虎狩の話しようと思う。虎狩といつてもタラスコンの英雄タルタン氏の獅子狩のやうなふざけたものではない。真正正銘の虎狩だ。場所は朝鮮の、しかも京城から二十里位しか隔つてゐない山の中、といふと、今時そんな所に虎が出て堪るものかと云つて笑はれさうだが、何しろ今から二十年程前は、京城といつても、その近郊東小門外の平山牧場の牛や馬がよく夜中にさらはれて行つたものだ。

一読してわかるように、この語り口は確かに「軽妙さ」に溢れていて、作品に「明るさ、はずんだひびき」を与えているものである。この後に続くエピソードなど、ユーモラスな「稚氣満々たるお伽話」の雰囲気をたたえたものでもある。しかし、前述したように、「虎狩」という表題のかもしれない出ず冒險譚的イメーჯや、又軽快な文体、内容を持った作品のすべり出しといったものが、最終部まで一貫して流れているかといふと、決してそうではないように思われる。作者は巧妙な手法を駆使して作品を展開していくのであり、この冒頭部の一見軽やかな口調もその一つであると言えよう。読者の好奇心を煽り立てる如くに物語を進めていき、最後に至つて自らの想定したテーマの在り所へと深く導く。そのテーマの序曲的役割りを、第二章が早くも示

さて、虎狩の話の前に、一人の友達のことを話して置かねばならぬ。その友達の名は趙大煥といつた。名前分るとほり、彼は半島人だつた。

と始められている。第一章でいかにも興味深げに記された「虎狩」の話は、ここで一旦しりぞけられてしまふ。それよりも、「一人の友達」「趙大煥」のことを語ろうといふのである。そして、この「友達」をめぐる話、実に第五章まで続き、第六章に至つてやつとその友人と共に経験した「虎狩」のてんまつを叙述する。全七章のうち、純粹にタイトルに相応しい「虎狩」といふ事件を扱つたのは僅か一つの章のみであり、あとは「趙大煥の話」とでも言えそうな挿話で占められている。その上、最終章こそ、その「趙大煥の話」を最も盛りあげると共に、作者のこの作品を書こうとする必然をも感じさせ、作品すべてのいわばおちと言へる構成を配して主題を強く提示している部分なのである。

このように作品中における虎狩のいきさつが、読み手の興味をつなぐ一つの狂言回しの役割りを果たし、その実、「私」の友人「趙大煥」について話すことを作者は意図していたのではないか、と考へる根拠として上述したような作品構成以外に、第七章における次の表現も見落すことのできないものであらう。

……十五六年、まるで彼とは逢はないのだ。いや、そう云ふと嘘になる。実は私は彼に逢つたのだ。しかもそれがこの此の間のことだ。だからこそ、私もこんな

いき 最後(ラスト)のシーン(場面)は、
く導く。そのテーマの序曲的役割りを、第二章が早くも示
している。第二章は、

話を始める気になったのだが、併し、その逢ひ方とい
ふのが頗る奇妙なもので、果して、逢つたといへるか、
どうか。(傍点・木村)

このような叙述に続いて、その「趙大煥」との「奇妙」な
再会の「次第」を作者は語っていく。従つて、時間的には
第一章の冒頭「私は虎狩の話をしよと思ふ」という文章
の書かれる前に、第七章における「私」と「趙」との「十
五六年」ぶりの出合いがあつたのであり、それがこの話を
始める動因となつてゐる。とするならば、「趙」との再会
によつて「私」は何を感じ、何を待たというのであろうか。
また、それがいかように作用して「私」に「虎狩」の話を
させることになつたのか、一篇のテーマにかかわる問題で
あろう。

このような問題を考える順序として、作品の章立てに従
い、「私」と「趙」との最初の出合いから「趙」が突然、
「姿を消して」了うまでの関わり方についてまとめてみよ
う。「趙」は、「割に背の高い、痺せた、眼の細い、小鼻
の張つた」少年であり、「半島人」であるにもかかわらず
「日本語が非常に巧み」で、小説好きであつたから「江戸
前の言葉」さえ知つてゐた。しかし、「彼のお母さん」は、
何かの事情があるらしく、親しさにもかかわらず「私」は
一度も見たことがなかつたという。この「趙」と「私」と
が知りあいになつたのは、「私」が内地から龍山の小学校
に転校してきて、新しい級友とは異なる発音で文章を読み、
その恥ずかしさをまぎらわす行為を「趙」によつて擲擻さ

う云ふと嘘になる。実は私は彼に逢つたのだ。しかも
それがつい此の間のことだ。だからこそ、私もこんな
れたことがきつかけとなつてゐる。二人は取つ組み合ひの
喧嘩をするが、「嘲笑に充ちた笑ひ」を見せた「趙」は、
意外にも、「弱虫」で「喧嘩をして勝つたためし」のない
「私」に苦もなく組敷かれてしまふのである。自尊心が強
く、それゆえ他の者に皮肉の刃を向けざるをえない「趙」
は、喧嘩という肉体的な次元では全く無力であることをさ
らけだしてしまふ。しかも、この性向は「趙」のみならず
実は「私」にもほとんどそのままあてはまるものであつた
のだ。すでに、鷲只雄氏は、

……この小説は語り手である「私」の視点から趙が描
かれるのみで、「私」なる人物の性格・心性はあまり
明瞭な輪郭をもたないのであるが、それはつまるところ、
多く趙を語ることが同時に「私」を語ることにも
なるという陰微なかたち故の必然である。

と指摘してゐる。「趙」が「半島人」で「私」は日本人だ
という点をのぞけば、「ませた少年」であると自覚してい
る「私」と同等、あるいはそれ以上に「趙」も「ませ」て
いたし(名前を名のる際のエピソードがそれを示している)、
同じ少女にはのかな恋情を抱いたり、次々と眼前に展開し
ていく「生の不思議」や「奇怪にして魅力に富める人生の
多くの事実」に対して、二人は等しく「鋭い好奇の眼を光
らせはじめ」ていることなど、列挙していけば二人の精神
的同質性というものは一目瞭然にわかるであらう。

「趙大煥」という人物は、実際に京城中学に学ぶ中島敦
の同級生としていたかも知れないし、「趙」でなくともそ

のモデルになった人間は存在していたと想像もされる。しかし、作品においては多分に中島の自画像的イメージを与えられた人間として描き出されているのである。おそらく

中島の意識においては、そのような自己のイメージを託すのに相応しい人物を選びとったのであろうし、作品のテーマをいわば自己の発見劇というような形のもとに成そうとしていたと考えられる。そのことを裏づけるエピソードが、第五章における「趙」の発した「強いとか弱いとかつて、一体どういふことだらうなあ」との言葉をめぐつての論議である。ここに、「ヴェールにつつまれ」てはいるにして

も、「朝鮮人の悲しみ」を読みとる浜川勝彦氏の評言が思いおこされるが、中島の意図はもつと別のところにあると言えらるだろう。それは、「趙」の次のような言葉から推しはかれるものである。すなわち、「……俺はね、あんな奴等に殴られたつて、（中略）負けたとは思ひやしないんだよ。（中略）それなのに、やつぱり（中略）くやし

いんだ。それで、くやしいくせに向つて行けないんだ。怖くつて向つていけないんだ。」と。ここには、意識、或いは精神においては不屈を持しても、感覚、肉体が恐怖を

覚えざるを得ないという、自己のうちにおける精神と肉体との一種の相剋がみてとれるであろう。或いは、「虎狩」と

ほぼ同じ頃執筆されたと推定され、題材的にも「同じ時期の内の成長を物語つてゐる作品」であるところの「プ

ウルの傍で」における「肉体への屈服」と「精神への蔑視」という言葉を用いるのが相応しいかも知れない。この作品

における上級生から制裁をうける「彼」（三造）の体験は、ほとんどそっくり「虎狩」の「趙」のそれに相応する。

「肉体への屈服」、「精神への蔑視」に対する憤りと失望とが、「趙」をもまたとらえている。力による支配、統治を受け、被圧民族としての位置にいることを余儀なくさせられている「半島人」の「趙」に、中島は自己に個有の問題をあてはめようとしているのだ。精神性を強く持った人間が、反精神的なものにふみにじられざるをえない憤り

やくやしき、またそれはねのけえない自己の無力さといった問題であり、それが自分の生きる方向にまで深くからみついているということでもある。「裸の、弱虫の、そして内地人ではない、半島人の、彼を見せてくれたこと」が、「私」には満足を与えたと記される時、「私」の喜びはまさに自分と同じ精神構造を有した人間への共感によるものであることを示している。

第六章、虎狩の場面における「私を驚かせた」「趙大煥の態度」は、思いがけないことに、そのような精神性を有した人間の中に流れている「此の地の豪族の血」を痛感させる。それは、「私」と「趙」とを隔てる「血」であり、また「私」の中にも目には見えないところに流れている自特

の「血」でもあると言えるように思う。「趙」の「刻薄な表情」に「終りを全うしない相」を思いうかべる「私」には、「血」の持つ無気味さが感じとられていた筈である。

そして第七章の「私」と「趙」との「奇妙」な再会の場面が登場する。この時の「趙」の風本は一種異議である。「私」

期の内面の成長を物語つてゐる。『私』と『趙』との「奇妙」な再会の場面が登場する。この時の「趙」の風体は一種異様である。自覚されざるを得ない自己への認識をも含んでいる。「私」も「趙」と大差のない「異様な風体の男」なのであろう。

古い羊羹色の縁の、ベロリと垂れた中折を阿弥陀にかぶつた下に、大きなロイド眼鏡―それも片方の弦が無くて、紐がその代用をしてゐる―を光らせ、汚点だらけの詰襟服はボタンが二つも取れてゐる。薄汚い長い顔には、白く乾いた唇のまはりに疎らな無精髭がしよぼしよぼ生えて、それが間の抜けた表情を与へてはゐるが、しかし、又、其の間の迫つた眉のあたりには、何かしら油断の出来ない感じをさせるものがあるやうだ。

「田舎者の顔」と「掏摸の顔」とを一緒にしたやうだと、「私」は思う。虎狩から二年程経つて、第五章における、エピソード（発火演習の夜、上級生から制裁をうけた）の後、「私」の前から姿を消してしまつていた「趙」の、あまりにも変貌してしまつた表情であると言えよう。「趙」は「私」に気づくが、「私」は容易に記憶がもどつてこない。「趙」はとりとめない、又不思議な話を「私」に語る。人間の記憶というもののたよりのなさと、それでいながら機能的には間違ひなく働いてゐる事の矛盾。「感覚とか感情ならば、うすれることはあつても混同することはないのだが、言葉や文字の記憶は正確なかはりに、どうかすると、とんでもない別の物に化けてゐることがある。」との「趙」の言葉は、「趙」と「私」との現在のそれぞれの生をもあらわしている。いわば、「私」はここでうらぶれ、「薄汚」れ、それでもなおかつ観念や精神にのみ価値を見出し、町をさまよつてゐる自分の姿に出会つたのだと考えられはしないだらうか。「趙」との再会は、「十五六年」後にふと

そして第七章の「私」と「趙」との「奇妙」な再会の場面が登場する。この時の「趙」の風体は一種異様である。自覚されざるを得ない自己への認識をも含んでいる。「私」も「趙」と大差のない「異様な風体の男」なのであろう。

「言葉や文字の記憶」は数々のエピソードとして、「趙」と「私」との少年時代のかかわりを「正確」に残している。しかし、それらはすでに美化され、記録化されておき、生きたものとしては手の中にない。その代わり、「うすれ」てしまつてゐるにしても、「趙」と「私」との精神的同質性とも言うべき「感覚や感情」は現在にまで生づいて残る。

一篇の主題は、「趙」と「私」との交渉を描き、再会の「異様」さを配することによつて、輝やかしい「好奇の眼」を有した幸福な時期をすぎ、いつ知らず生の疲労にとらわれはじめてゐる自己の現在の姿を認識せざるを得ない「私」の感無量の思いに在ると言えるだらう。しかし、「私」は明確に生きる方向を見出しているわけではない。「大東京の人混みの中に見失つた」「趙大煥」のあとを「私」も又自らを追い求める如く探し続けねばならないのである。

付記 紙幅の関係で、「虎狩」論の前半部分をここに記しました。従つて、註は付きません（その二）
において記したく思つております。

（本学講師）